

# スリランカの「女性銀行」

穂坂 光彦



【ほさかみつひこ】日本福祉大教授(居住福祉都市計画論)。1947年、東京生まれ。77年かじ国連職員としてアジア諸都市のスラムの改善に携わる傍ら、NGO「住まいの権利アジア連合(ACHR、本部バンコク)の設立・運営に参加。95年から現職。著書に「アジアの街わたしの住まい」(貧困と開発)(共編著)など。

スリランカ最大の都市コロンボ。都心の大通りを一歩それると目に入るのは、狭い長屋住宅の中庭で共同の蛇口に並ぶ女性たちだ。持てるだけのポリタンクを抱えて炊事の水を確保する。少し郊外へ行くと、線路わきや湿地に廃材を利用した住宅が立ち並び、法的には無権利だが、家族や友人が力を合わせて建てた住まいだ。こうした「スラム」の住民が、コロンボ市民の半数近くを占める。

積極的に認め、土地や住宅融資を提供していた。しかしグローバル化の進む九〇年代になると、低所得者向けの住宅金融はほぼ解体し、外国資本が高級マンションを建設して投機的な販売を始めた。スラムの人々は、いつ追い立てられるかわからない不安の中で暮ら

り、マネルさんの土地も法的に一定の権利が認められ、それをきっかけに彼女は数人の仲間と互助グループをつくる。定期的に貯金し、必要があれば融資し、その試みを、彼女たちは周りの地区にも伝えていった。九一年にマネルさんと仲

間は、自分たちの組織を「女性銀行」と名づけ、独自の相互信用組合として登記した。スラムで暮らす女性が自主的に十人程度のグループをつくり、毎週五(約六円)ずつ貯金する。「銀行株」を買つこともできる。一定の経験を積んだ

## 自前の資金地域で循環

グループが地域ごとに連合して「支店」を名乗る。グループの資金は支店に集められ、グループへの融資として再配分される。誰がいくら融資を受けるかの決定は、グループでの

一九八〇年代、スリランカの自由主義政権は、都市貧困層を政治的な支持基盤として「住まいの権利」を

すよつになつた。ルーパ・マネルさん(46)は十九歳の時に農村からコロンボに出て結婚し、夫の家族とともに質素な家に住んだ。運河と鉄道に挟まれた公有地に立つ家は、豪雨のたびに浸水した。八八年に政府の改善事業が始ま

た。協議に任される。支店からグループへの融資額は初めは一人当たり百五十シタだが、メンバーが経験と実績を重ねると十シタ以上も可能だ。利子は原則として月4%。高いよつにみえるが、もし女性銀行がなければ高利貸に頼るほかはない。その利子は月20%だ。

ある会員は「子どもの問題も住宅の悩みも話ができ、希望が持てた。グループに入って自分の居場所を見つけた気がした」と言つた。

数年からの新しい試みは保険制度づくりだ。会員は支店に開設した「健康口座」に医療保険料を払い込む。看護師が常駐する女性銀行診療所が少しずつ各地にできていて、会員家族が(毎週月曜日に掲載します)

間たちは、自分たちの組織を「女性銀行」と名づけ、独自の相互信用組合として登記した。スラムで暮らす女性が自主的に十人程度のグループをつくり、毎週五(約六円)ずつ貯金する。「銀行株」を買つこともできる。一定の経験を積んだ

た。協議に任される。支店からグループへの融資額は初めは一人当たり百五十シタだが、メンバーが経験と実績を重ねると十シタ以上も可能だ。利子は原則として月4%。高いよつにみえるが、もし女性銀行がなければ高利貸に頼るほかはない。その利子は月20%だ。

ある会員は「子どもの問題も住宅の悩みも話ができ、希望が持てた。グループに入って自分の居場所を見つけた気がした」と言つた。

数年からの新しい試みは保険制度づくりだ。会員は支店に開設した「健康口座」に医療保険料を払い込む。看護師が常駐する女性銀行診療所が少しずつ各地にできていて、会員家族が(毎週月曜日に掲載します)



### 文化

## ピープルの地平へ

### 世界の市場化に抗して



津波で夫を失った女性と話すルーパ・マネルさん(右から4人目) 2005年3月、スリランカ・コロンボ近郊のガンパ八県

援助機関の手で世界中に広がってきた貧困層への小口融資(マイクロクレジット)の中には、結果的に競争と格差拡大を押し進めている例も少なくない。だが、それらの例とは異なり、スリランカの女性銀行は、自前